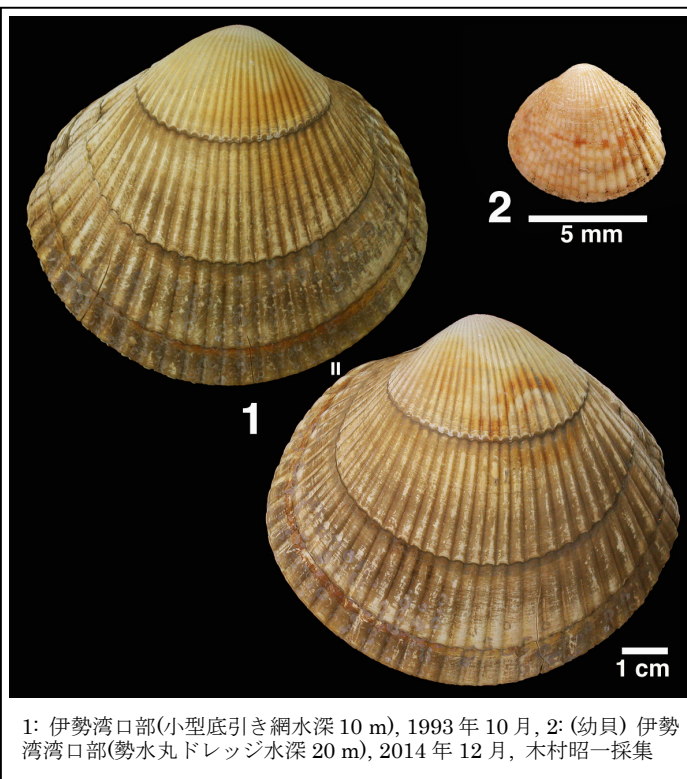


イシカゲガイ *Keenocardium buellowi* (Rolle)

【選定理由】

本種は、本州から九州に分布するとされている (松隈, 2017)。福岡県内では玄界灘でのみ記録されている (高橋・岡本, 1969) が、確認者は平松達男と特記されており、当時から普通種ではないことが想像できる。瀬戸内海 (稲葉, 1982)、伊勢湾 (松本, 1979) から分布記録がある。本種は稲葉 (1982) が東北・北海道型と定義した、「内海が太平洋側の分布限界である、外海では生息し得ないが、低温・低塩分の内海に生息している貝類群集」に含まれる。

県下では主として伊勢湾湾口部の水深 10–30 m で操業されるトロール漁業で採集されることが多かったが、2000 年以降生貝はほとんど見られず、成貝の殻 (図 1) は大型で目立つ存在であるにもかかわらず、死殻もほとんど確認されない。2011–2015 年に行われた勢水丸 (三重大学生物資源学部) によるドレッジ調査で伊勢湾湾口部において殻長 10 mm 以下の幼貝 (図 2) が複数個体採集されたので、現在も伊勢湾湾口部には本種の個体群が残されていると考えられる。生息水深帯がやや深いのでモニタリングが難しいが、絶滅の危険性が非常に高い種と評価された。



1: 伊勢湾湾口部(小型底引き網水深 10 m), 1993 年 10 月, 2: (幼貝) 伊勢湾湾口部(勢水丸ドレッジ水深 20 m), 2014 年 12 月, 木村昭一採集

【形態】

本種は殻長 40 mm とされる (松隈, 2017) が、伊勢湾湾口部で確認される大型個体の殻長は 70 mm に達する。殻は前後に細長い卵形で、膨らみは強い。殻質は同科のトリガイに比較するとやや厚いが、非常にもろい。殻全面に放射状の肋が約 30 本発達し、強い円形の肋 (成長停止線) も強い。

【分布の概要】

【県内の分布】

伊勢湾湾口部から渥美半島沖 (渥美外海) の水深 10–30 m でかつては大型個体の生貝 (図 1) が採集されていたが、現在は稀に死殻は採集されているが、生貝はほとんど採集されない。勢水丸のドレッジ調査では近年も伊勢湾湾口部から生貝 (幼貝; 図 2) が確認されている。

【世界および国内の分布】

本属は、全て北方系の種で構成され、最も近似するエゾイシカゲガイ *Keenocardium californiense* (Deshayes) は、オホーツク海から鹿島灘に分布するとされているが、本種は本州から九州に分布する (松隈, 2017)。伊勢湾での生息は確認されているが、瀬戸内海での現在の生息状況は不明。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は水深 10–100 m の細砂底に生息するとされているが (松隈, 2017)、瀬戸内海では潮下帯から水深 60 m に生息すると記録されている (稲葉, 1982)。県下では主に伊勢湾湾口部から渥美半島沖 (渥美外海) の水深 10–30 m の砂泥底より生息が確認されていたが、近年生貝はほとんど採集されない。また、近年伊勢湾内では死殻もほとんど採集されない。2015 年の勢水丸によるドレッジ調査で幼貝が採集された海域は、潮通しがよい貝殻混じりの砂泥底で、多様な貝類の生息が確認できた (木村, 未発表資料)。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息地の環境自体が現在県下内湾域では著しく減少しているため、減少の要因と考えられる。また本種は冷水性種なので、温暖化、黒潮の大蛇行による海水温の上昇も減少要因となる可能性がある。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である上述したような生息環境を保全することが重要であろう。

【特記事項】

生息水深帯がやや深く、モニタリングが困難な事もあり、国のレッドデータブックには掲載されていないが、瀬戸内海、伊勢湾の個体群については、今後絶滅危惧個体群とすることも考慮するのが望ましい。近似種のエゾイシカゲガイは、食用種「いしがきがい」として近年岩手県で養殖され、流通量が増加している。

【引用文献】

稲葉明彦, 1982. 瀬戸内海の貝類. 181pp. 広島貝類談話会, 向島.  
松隈明彦, 2017. イシカゲガイ. in: 奥谷喬司 (編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. pp. 578, 1239. 東海大学出版部, 平塚.  
高橋五郎・岡本正豊, 1969. 福岡県産貝類目録. 154pp.

【関連文献】

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類 (予報). かきつばた, (26): 18–20.

(木村昭一)